

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 7 号

発行日
2023. 7. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○「岳陽チャンネル」、スタート!!

別途、HP上でアップしている「新・教育協働への道(1)」でも触れたように、今月8日(土)から、それまでの「教育協働セミナー」に替えて、新しく「岳陽チャンネル」という名の、Zoom交流プログラムを立ち上げた!「教育協働」のための人的交流、情報交流という目的は、もちろん変わらないわけであるが、それよりも何よりも、こちらで設定した日時(原則月1回、第3土曜日、10:30~12:00)では、メンバー登録している人の大半が、なかなか顔を出せない(他の用事・スケジュールがある?)というジレンマ(問題)があつたということである!!

否、真相?は、もつと別なところにある(顔触れが固定している?テーマ/事例が、今の自分にとっては、さほど切実ではない?メリットがない?等々、何らかのリニューアルを果たさなければ、このままじり貧となってしまう?まさに「マンネリ化」の危機?を迎えていたわけであるが、一方で、そういうことは、ある意味世の常でもあるので、もう、この辺で止めにしてもいいかなあ?と思いはじめていたということでもある!!もつと突っ込んで言えば、他ならぬ私自身が、そのセミナーの開催意義を、あまり感じなくなっていたということでもある!!

とは言え、今回改めて分かったことは、そんな状況(關係)にあつても、それなりの人(少なくとも10人以上!)が、交流や情報交換を続けたいと思つているということであり(義理も手伝つて)、やりようによつては、新たな可能性、やりがいも出てくるのではないかとということである!だから、頑張ろう(折角のアカウント所有でもある)!

○何故か、気になる?「やだまじ」の世界!!

ところで、今、こんなことを、ここで書くべきかどうかは悩ましいところであるが、一度は、彼のことを書きたいとは思つていたので、思い切つて、ここで書くことにする!ただ、予め断つておくが、私が、彼の音楽作品自体のファンであるということではなく(もちろん、その要素も、最近では増えている?)、一人の、同世代の人間の生き様として、認められる!簡単に言えば、そういうことである(ただ単に、嫉妬?しているとも言える?)!!

ちなみに、分かる人は分かるであろうが、私も、彼も、昨年「古希」を迎えた(しかも、誕生日も同じ!彼が、少し早い)、怪しげな老人?である!しかしながら、あのバイタリティ、人と人をつなぐ、とてつもなく大きな力、ネットワーク力!同じ年齢の人間として、驚異でもある(比べること自体が、世間からは、まったく不適当とも言われそうであるが?)!本当に、掛け値なしに、そう思う!有名・著名人に限らず、基本的には、他人(俗に言う「成功している人」?)に敵しい私ではあるが(本当は、優しい)、何故か、彼には、そのような思いをしてしまつていたのである!しかも、「徐々に」!

なお、NHKの番組「今夜も生で さだまさし」、毎回欠かさずに見ているわけではないが(見るにしても、最近では、録画視聴が多くなつているが)、あの番組の内容出演者、趣旨等も、大いに共鳴し得るものとなつてゐる!多くの人が、参画し(手紙等を含む)、歓迎しているはずである!正直、何とも羨ましい限りである!

○やはり、「この」は書いておかなければ?!

過日、ある人(Hさん)の訃報に接した!第一報は、既に別のところから入つていたが、その後の、沖縄の知人(Sさん)からのメールで、改めて、故人の生き様(経歴等を含む)、存在意義の大きさを知らされた!添付の新聞記事によれば、「66歳」とあつた!本当に、早過ぎる!本人も、さぞかし無念であつたことであろう!察するにあまりあるところである!

そこで、先に、「さだまさし」のことを書かせてもらったが、ここで、「やはり、この」は書いておかなければ?!!」ということを書き始めた理由は、かつて、がん宣告を受け、だが、不思議にも、今こうして生きている(ただし、糖尿持ち、そして、せつかく生き延びているのだから、何か、自分が、やらなければいけないと思つてゐることをやろうと、それなりにがんばってきた私にとつて、彼の生き様と功績は、とてつもなく偉大で、何よりも、素直に称えられるものであるからである!

なお、余計なことではあるが、一度、電話で話をした時の、(声)印象は、私と同じくらい?否、もう少し上?そんなことを思つたものであるが、それはともかく、その時の依頼?を、まさしく彼のためだけに、受け止めておけばよかつたのかなあとも、今は思うが、ただそれは、それだけの話である!ということ、こんな形で申し訳ないが、私なりのお悔やみ、否、可能な限りの賛辞を送りたい!とにかく、お疲れ様でした!

最後に、ここでは、これ以上のことは書けないが、出身のM県では、事務職からG町の教育長になられ、確か公立では、日本では初めての「中高一貫校」を実現された(これについては、当時、私も、地域と学校の新たな関係ということ注目していた!その後の波及効果については、周知の通りである!)!

その後(いきさつはよく知らないが)、H教育大学の大学院の立ち上げ(教育政策リーダーコース)に尽力され、多くの学生(現職の教育長等)、支持者・理解者を生み出される一方、S県O市、O府S市の教育長もされてゐた(まさにスーパーマン?)!知人の深い悲しみや、そして、何よりも、彼の存在の大きさを、つくづく感じさせられた次第である! (井上)

『古代史上で活躍？する女性（姫神）達！』

古代史に興味をもっていない人には、この記事は、少し敬遠されるかもしれないが、実は、4月から始めている「古代史研究会」と称するズーム交流で、今月（15日）は、女性（姫神）に焦点を当て、意見（情報）交換をすることにしている。

であれば、一般には、すぐに、かの「天照大神」や「豊受大神」（伊勢神宮祭神）、否、「卑弥呼」や「白耳」（魏志倭人伝）と言う名が挙がってこようが、実は、今回は、何故か、前回の交流で話題となった、高（山貴）久子という人の『姫神の来歴 古代史を覆す国神の系図』（新潮社、2013年）を準テキスト？として行うことになっている。というのも、そこに登場している「櫛名田姫」と「丹生津（もろ）姫」が、なかなか解明できない、我が「日本（倭国）」の古代の真相を握らされている人物（勢力？）なのではないか？ということであるが、果たして、彼女達は、どのような存在なのであろうか？改めて、意見交換（新珍？発見）が楽しみである（否、不安先行かな？）！

なお、作者の高山さん自身は、残念ながら、若くして亡くなっている！もし、今も存命ならば、さらなる異彩を放っていたことであろう！惜しいものである！

ということで、他にも、豊玉姫、玉依姫、スセリビメ、宗像三女神、神功皇后、よど姫、とよ姫、はたまた、神夏磯（かむなそ）姫、田油津（たぶら）姫等々、怪しげな？姫神達は目白押しなのであるが、一方で、かの琉球王朝では、国王一族の女性（姉妹等）が、「聞得大君（きこえのおおきみ）」となり、奥（影）の差配者として、一族を守護していた！

それは、あたかも、かの「卑弥呼」のようでもあった！つまり、神（おなり神／太陽神）の意思を取り次ぐ、まさに「大日靈貴（おおひるあのみこと）」であったわけである！ちなみに、かつて「平塚らいてう」が、「元始、女性は太陽であった！」と言ったというところであるが、おそらく、それは、このようなことを指していたのかもしれない！

〈短歌に託して名ばかりの文月？せめて思いだけは〉

・岳陽チャンネル 苦肉の策の

最後の呼びかけ？ これでよいのだ！

・同い年 いつのまにやら 気になる人に

その言動は 認められ得る？！

・敢えて書く 彼の偉大さ 二重にあり！

開きし世界と その生き様！

・太陽 月 星！

古代人の 想いは深し そは何故？！

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕（7）

○何故、二人の関係解明が「突破口？」となるのか？！
ということ、もし、そうだとすれば、そのことが、その後の九州と近畿（天和）の状況（二極化の構図？）を形づくっていったということになる（ただし、「日記」は、後者の「崇神」／物部氏？勢力からの歴史叙述であることは、言うまでもない）！しかしながら、まだまだ、私が言わんとするこ

とは明瞭ではない（ある意味、当然ではあるが）！
つまり、史実？としての、当時の状況、氏族の関係が、具体的に描かれていないということである！とは言え、その具体化の突破口？が、「開花天皇」と「崇神天皇」の関係解明にあることは、かなりの感触をもって言えるのではないか？今後は、そこに基軸をおいて進むだけ！

そこで、改めて、何故、「開花天皇」と「崇神天皇」の関係解明が、その「突破口？」となるのかであるが、一つは、当時（8世紀前後）の、『日本書紀』編纂の主体（持統／藤原政権）が、第10代の「崇神」を、「大和王権」（近畿倭国→日本国）の、事実上の初代王（ハックニシラス

スメラミコト）としてしていることであるが、彼が、北部九州から（それ以前は韓半島？伽耶？）、おそらく吉備を経由して？、大和に入ったことは間違いないからである（纏向→輪王朝）！

ちなみに、創作上？の初代王「神武」（こちらも、ハックニシラスメラミコト）は、記紀全体の内容構成の必要（そもそも、我が国の紀元／起源を、讖緯？思想を用いて、可能な限り古く見せるために、BC660年としたことによる！）から考え出されたことは、これもまた、ほぼ間違いない！

ただし、そのモデル（ダミー？）は、当然？いたのであり、それが、3世紀初期の、まさに鴨族の統領？「建角身命」（八咫鳥）であった！とは言え、そこには、大きな穴（問題？）が生じた！要は、史実？を800年余り遡らせたので、その期間を、どのように埋めていくのかということである！

そこで、これからは、私自身のオリジナル（空想？）かもしれないが、そこに、いわゆる「欠史八代」が考案され、その空白を補おうとした！しかも、それらは、ある意味では史実であること、いわゆる「神話」という形で、婉曲に投影させた！
とりわけ、伊弉諾／伊弉冉による「国生み／神生み」、そして「別離」、その後の、伊弉諾による「三貴子」生誕、そして、天照大神と素戔嗚命による「誓約（ちかひ）」、その後の「天岩戸事件」、出雲追放、八岐大蛇退治」等、さらには、素戔嗚命の子？の大国主命による「国づくり、国譲り」等々。

そして、最後の、天照大神の孫の「瓊瓊杵尊（にぎはこ）」による「天孫降臨」、さらには、「日向三代」の物語と続いていくわけであるが、実は、それらは、単なる神話ではなく、持統・藤原政権が把握していた、大和建国あるいは政権獲得までの史実であり、それらをデフォルメ化したものだったということである（だから、欠史八代の事績自体は、少ないのでもある）！

〈編集後記〉日本全国が、今年もまた、集中豪雨や暑さに苛まれていくというのに、こんなことを書いていただけでよいのかという自己嫌悪？を感じながらも、今回もまた、一応紙面を構成することができた！コロナ第9波？気にはなるが、私達なりの夏の羽ばたき？そういうことである。（井上／堂本）